

玉鬘十帖の意義

一、序

玉鬘十帖は、『源氏物語』の中で比較的研究が少ない部分である。のみならず、大きな見解の相違がある。玉鬘十帖に光源氏の栄華が讃えられることには一致を見るものの、そこに源氏の衰えがあるか否かに意見が分かれる。近年の研究としては玉鬘十帖の光源氏が『古今集』的恋歌の世界をさながら辿ることを指摘した高木和子氏の論が注目にあたいするが、氏は玉鬘が髭黒と結ばれることよって源氏への愛情が永遠に保証されると論じて源氏の衰えを否定した。光源氏という存在が物語を突き動かす論理となつていくという指摘と、記憶の反芻とそれに照らし出された現在の往還運動に物語を切り開く方法があるという高木氏の指

権 桃楹

摘は、特に示唆的である。そして六条院の新たな美質である「いまめかし」に注目した河添房江氏の論文^③や、少女巻の夕霧に注目して大和魂の世界を論じた藤原克己氏の論文^④も玉鬘十帖における光源氏像を垣間見させる論として有効である。また、自然を人為に加工する「みやびの業」が繰り上げられる世界を論じた秋山虔氏の論文^⑤は示唆に富む。中でも、

：人間の本然的な生命力の不在、またそれと緊張的
にはたらきかけあうことよって新しく人間よって
発見される自然の不在、言い換えれば、人間が物を創
造し、同時に自己を造り変えてゆくという積極的な文
化能力を抛棄し、伝統化された規矩に身をゆだねる技
術の錬磨熟達の中に、生の矛盾を解消しようとする人

間矮小化を認識すべく、「四季の尊重」「恋の尊重」はそのことを前提としてこそいわれるべきである

の文章からは、玉鬘十帖を切り開いた、惰性を拒む精神が垣間見られるように思われる。また、三角洋一氏が、玉鬘や夕霧といった源氏の「子どもたちがわが源氏のありようを相対化し、中年の年齢を刻み込んでいる」と論じたのも看過できない先行研究⁶⁾である。

本論文では以上の研究を踏まえたくて、少女巻をも視野に入れてこの十帖が正篇における光源氏の造型にどんな位相を占めるかを確認する。考察は玉鬘を登場させる物語の背景から始めて、彼女の登場が持つ意義と彼女を物語世界から退場させる方法の検討へと続けることにする。

二、玉鬘登場の方法

玉鬘巻での物語がそれまで流れてきた時間を逆行して玉鬘を登場させることに注目し、物語を組織編成する方法の問題として取り上げたのは三谷邦明氏である。玉鬘巻の冒頭には「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔をつゆ忘れたまはず、…」^(③玉鬘87)と急死した夕顔を忘れかねる源氏に関する言及があるが、それは未摘花巻以来初めてである。それまで物語が触れてきた内容は冷泉帝の誕生、須磨

・明石での流謫生活と政界復帰、そして六条院造宮などと、夕顔との関係性は薄かった。が、玉鬘巻の冒頭で物語は突然、それまでの源氏にはいつも夕顔が忘れられなかったと語る。未摘花巻以降語られない世界に沈潜してしまった夕顔を取り巻く人物たちの時間が、再び表面に浮上するようになったのである。その長い歳月を示すべく物語は、筑紫へ下向した四歳^(③玉鬘88)、美しく成長した二十歳^(③玉鬘93)などと、玉鬘の年齢を詳細に記す。玉鬘巻には夕顔の死から玉鬘が源氏に引き取られるまで、長い歳月が圧縮されて語られる。若紫巻に十歳程度だった紫の上を「女君は二十七八にはなりたまひぬらんかし」^(③玉鬘119)と察する右近の視線や、玉鬘を発見したという報告を聞くために源氏が右近を呼んだ次の場面においてもそれが窺える。

(源氏八) 大殿籠るとて、右近を御脚まゐりに召す。「若き人は苦しとてむつかるめり。なほ年経ぬるどちこそ、心かはして睦びよかりけれ」とのたまへば、人々忍びて笑ふ。「さりや、誰かその使ひならいたまはむをばむつからん、うるさき戯れ言いひかかりたまふを、わづらはしきに」など(女房タチ八)言ひあへり。「紫の上も、年経ぬるどちうちとけ過ぎば、はたむつかりたまはんとや。さるまじき心と見ねば、あやふし」など、

(源氏ハ)右近に語らひて笑ひたまふ。いと愛敬づき、をかしきけさへ添ひたまへり。今は朝廷に仕へ、いそがしき御ありさまにもあらぬ御身にて、世の中のどやかに思さるるままに、ただはかなき御戯れ言をのたまひ、をかしく人の心を見たまふあまりに、かかる古人をさへぞ戯れたまふ。(③玉鬘119〜120)

右に続いては夕顔の遺児を発見したという右近の報告があるが、そのことから察すると、「御脚まゐり」はその場を作る口実という性格が強い。源氏は紫の上の前での報告を憚っていた右近に玉鬘の話を知ったために、若者は嫌がるようだから「御脚まゐり」には気が合う年寄り同士が良いという冗談で彼女を呼んだのである。一方、源氏に呼ばれた右近は、夕顔の死を語る際に「服いと黒うして、容貌などよからねど、かたはに見苦しからぬ若人なり」(①夕顔182)と紹介されていたが、右の引用では「年経ぬるどち」や「古人」などの表現があてられる。これらのことから玉鬘巻に圧縮された時間が察せられるが、その時間の中で源氏は夕顔を恋しく思い続け、右近は玉鬘を「いかで尋ねきこえむ」(③玉鬘11)と願いつづけてきたのである。玉鬘巻では、それまで取り上げてきた物語の時間が意味づけ直されている、とも言える。物語は「若人」だった右近を「古人」に

変えてその時間の長さを記し、その右近と長年を過ごしてきた源氏にも時間の蓄積があったことを暗示する。玉鬘は物語世界にそのような時間を示しながら源氏の娘として六条院に引き取られたのだが、そのような登場の仕方は少女巻での五節に関する叙述に類似する。

少女巻に登場する五節に関する記事は、雲居雁との仲を裂かれた夕霧の「心」を「慰」める(③少女60)べく挿入された、と言つても過言ではない。藤壺と密通を犯した源氏は「わが御心ならひ」に夕霧を紫の上の居る二条院の西の対には近づけなかつた。が、夕霧は五節準備の騒ぎの紛れにそこに入り込み、舞姫の惟光の娘を垣間見て心惹かれた(③少女61)。一方、五節の日に参内して舞姫を見た源氏は、

殿参りたまひて御覧するに、昔御目とまりたまひし少女の姿思し出づ。辰の日の暮つ方つかはす。御文の中思ひやるべし。

をとめごも神さびぬらし天つ袖ふるき世の友よはひ経ぬれば

年月の積もりを数へて、うち思しけるままのあはれをえ忍びたまはぬばかりのをかしうおぼゆるものはかなしや。(③少女63)

と、かつて縁を結んだ筑紫の五節を思い出し、手紙を贈る。

傍線部の「昔：…思し出づ」「神さびぬらし」「よはひ経ぬれば」「年月の積もり」からは源氏が時間の経過を感じていることが窺える。周知の如く、光源氏と五節の舞姫との関係が初めて確認できるのは、花散里巻で「かやうの（中流ノ）際に、筑紫の五節がらうたげなりしはや」（②花散里155）とある、源氏の回想である。人知れぬ恋の悩みに芳しくない政治状況が加わった源氏は、「忘れもはてたまはず、わざともてなしたまはぬ」花散里の悩みを推測して彼女の邸に向かう（②花散里153）。その途中、源氏は中川の女の変わりを知って筑紫の五節を回想するが、このような展開から察すると、筑紫の五節は源氏に積極的に顧みられない女の心変わりという問題を背負っていたと言える。無論、濤標巻に「女（＝筑紫ノ五節、（源氏ノタメノ）もの思ひ絶えぬを、親はよろぶに思ひ言ふこともあれど、世に経んことを思ひ絶えたり。」（②濤標299）とあることから分かるように、筑紫の五節は積極的に顧みられなかったにもかかわらず源氏を忘れない女だった。右の引用での源氏はそのような筑紫の五節に対してふとした感懐を隠さないうで手紙を送るようになっており、女はそれを「をかし」く思う。とはいっても、「年月の積も」った今ではもはや詮のないことであ

る。

源氏と筑紫の五節は、「五節」という呼び方や、五節の舞姫を見て「御目とまりたまひし」人を思い出したこと、そして「かけていへば今日のこととぞ思ほゆる日かげの霜の袖にとけしも」（③少女63）という筑紫の五節の返歌などから、五節の舞の折に会ったと考えられる。源氏と夕霧の親子が時を隔てて五節の舞姫として選ばれた女性に心惹かれたのである。

少女巻における五節の舞姫は、周りから「若き御心」や「ものげなきほど」などと幼く思われていた夕霧（③少女33）が、雲居雁と恋に落ちるほど成長したことを再確認させる。と同時に、源氏に筑紫の五節を思い出させることで、彼が年をとったことを示す。五節の舞姫は、子の成長に伴う親の加齢という、時間の流れが作り出す当然な成り行きを記したかのようである。しかしながら、源氏の加齢は別途の記事をもって記さなければならぬ、夕霧の成長をもたらしただ時間では説明し切れないものである。ここに時間を一元化しようとする物語の姿勢が垣間見られるが、このような交錯した時間は玉鬘十帖に受けつがれる。

玉鬘の登場の際に記される時間の経過に照応させるかのように物語は加齢を自覚する源氏の様子を取り上げる。六

条院の東の釣殿で夕霧や殿上人などとともに納涼をしていた源氏は、「心やすくうち休み涼まむや。やうやうかやうの中に厭はれぬべき齢にもなりにけりや」(③常夏227)と言いながら玉鬘の居所に向かう。また、篝火巻で夕霧や柏木らによって奏樂が行われる場面でも「御簾の内に、物の音聞き分く人のしたまふらんかし。今宵は盃など心してを。盛り過ぎたる人は、酔泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」(③篝火259)と、源氏は自らを「盛り過ぎたる人」だと言う。一見すると、見事に寮試の予行を終えた夕霧に感動して「子のおとなぶるに、親の立ちかはり痴れゆくこと」(③少女29)と漏らした源氏の言葉のように、子供世代の成長に引き替えて年を取ってしまった源氏像を描いたかに見える。しかしながら、源氏は老い行くことが許されない人物である。源氏は右近から「親と聞こえむには、似げなう若くおはしますめり、(玉鬘ト)さし並びたまへらんはしも、あはひめでたしかし」(③胡蝶179)と思われ、玉鬘からも「(兵部卿宮ヲ)活けみ殺しみ(玉鬘ヲ)いましめおはする(源氏ノ御様さま、尽きせず若くきよげ)」に見られている(③蜜203)。のみならず、野分巻の夕霧も「親ともおほえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。」(③野分266)と思っていた。物語は中年となった源氏を描くべく、玉鬘

の登場に際して歳月の経過を取り上げたものの、周りの視線を用いてなお若い源氏を描き続ける。このような源氏の特質は若菜巻に著しく表れているが、物語は加齢による衰えを知らない、なおも恋の世界に居続ける源氏を描く。超越性とも言うべき、経過する歳月の中でも衰えない若さを持った源氏はその特質によって、玉鬘十帖で玉鬘の相手にもっとも相応しい男君として想定されていく。例えば、端午の節句に六条院の馬場殿で行われた競射のちに花散里の居所に泊まる源氏は、兵部卿宮の話を持ち出す場面がある。

(源氏)「兵部卿宮の、人よりはこよなくものしたまふかな。容貌などはすぐれねど、用意気色などよしあり、愛敬づきたる君なり。忍びて見たまひつや。よしといへど、なほこそあれ」とのたまふ。(花散里)「(兵部卿宮ハ)⑦御弟にこそものしたまへど、ねびまさりてぞ見えたまひける。年ごろかくをり過ぐさず渡り睦びきこえたまふとききはべれど、昔の内裏わたりにてほの見たてまつりし後おぼつかなしかし。いとよくこそ容貌などねびまさりたまひにけれ。帥親王よくものしたまふめれど、けはひ劣りて、大君けしきにぞものしたまひける」とのたまへば、ふと見知りたまひにけりと

思せど、ほほ笑みて、なほあるを、よしともあしとも
かけたまはず。人の上を難つけ、おとしめざまのこと
言ふ人をば、いとほしきものにしたまへば、①右大将
などをだに、心にくき人にすめるを、何ばかりかはあ
る、近きさすがにて見むは、飽かぬことにやあらむと
見たまへど、言にあらはしてもなたまはず。
(③蜜207～208)

源氏の脳裡に玉鬘のことがあるのは、①で髭黒を「近き
よすがにて見むは、飽かぬことにやあらむ」と想起したこ
とから確認できる。源氏は婚定めでもするかのように、「昔
の内裏わたり」の経験がある花散里に、「人よりはこよなく
ものしたまふ」兵部卿宮を見た感想を尋ねる。源氏の意図
を知らない花散里は⑦で、弟であるが源氏より年上に見え
ると答えた。一見、兵部卿宮の成長ぶりを誉めたものによ
うに見えるが、『細流抄』以来指摘されているように弟より
も若く見える源氏への賞賛である。その判定に対して「ふ
と見知りたまひにけり」と感服する源氏の様子からは賛同
の意が読みとれるが、源氏は誰よりも優れた求婚者の兵部
卿宮を凌ぐ、若くありつづける求婚者だったのである。

源氏は歳月の流れに身を委ねて親になつていながらも、
「すくよかに親がりはつまじき」(③胡蝶174)性質を持つた

めに老いゆくことが許されない。そのような源氏の特質を
取り上げるべく玉鬘が登場したと言えよう。源氏は玉鬘に
よって一直線に進行する時間から脱線し、若くありつづけ
ることができたのである。

三「親がりはつまじき」源氏

引き続き、玉鬘が登場する意義を確認するが、それは養
女に対して源氏が恋情をうち明ける設定と深く関連するよ
うに思われる。玉鬘は源氏が思いを訴えられる養女として
登場したのである。この問題に関して触れる前に、まず彼
女が娘として六条院に迎え入れられてから一人の女として
見られる経緯を確認する。

右近から玉鬘との邂逅を報じられた源氏は世間には我が
子だと知らせて「すき者どもの心尽くさするくさはひ」に
したい(③玉鬘122)と語る。それを聞いた右近は玉鬘を助
けるのが源氏の「罪」を「軽ませ」ることだと言う(③玉
鬘122)。夕顔の死の責任が源氏にあると思つている右近が、
償いとして玉鬘に対する庇護を要請したかのようである。
源氏も「わが心長さ」を見果てなかつた夕顔の形見として
玉鬘を考えており(③玉鬘123)、玉鬘の六条院入りは庇護者
としての源氏の理想性も強調している。が、庇護者の父親

を求める玉鬘側の要請も看過できない。

庇護者を求める玉鬘の運命は、筑紫で彼女を養っていた少弐の「我さへうち棄てたてまつりて、いかなるさまにはふれたまはむとすらん。あやしき所に生ひ出でたまふも、かたじけなく思ひきこゆれど、何時しかも京に率てたてまつりて、さるべき人にも知らせたてまつりて、御宿世にまかせて見たてまつらむにも、…」(③玉鬘91)の遺言に端的に表れる。母の失踪や少弐の死といった庇護者の喪失が相次ぐ中で、玉鬘は「いかさまにして、都に率てたてまつりて、父大臣に知らせたてまつらむ。」(③玉鬘92～93)、「父大臣に聞こしめされ、数まへられたまふべきばかり思し構へよ」(③玉鬘115)といった乳母の言葉に見られるように、庇護者として父親をもとめるようになった。その設定には『住吉物語』の投影も看過できない¹²⁾。が、殊更に父親に拘る理由には、源氏と玉鬘を親子関係として描く必要がある。た物語の都合もあったと思われる。源氏を父親に位置づけようとする物語の態度は、

大臣の君(＝源氏)は、めでたくおはしますとも、さるやむごとなき妻どもおはしますなり、まづ実の親とおはする大臣にを知らせたてまつりたまへ(③玉鬘115)

という、乳母の言葉からも垣間見られる。引用は源氏に玉

鬘を迎える意志があることを右近から聞いて発せられた言葉だが、「実の親」による引き取りを望んでいた乳母は源氏が玉鬘を娘として迎え入れることを知ったのちに、「おのづから、さて人だちたまひなば、大臣の君も尋ね知り聞こえたまひなむ…」と六条院入りを説得する人々(③玉鬘124)の一人に回される。妻として六条院に迎えられることに反対していた乳母がその態度を変えて六条院入りを勧めていることから、源氏を玉鬘の親として位置づけようとした物語の方向性が確認できる。

玉鬘巻で、六条院入りした玉鬘は右近にうち明けた源氏の望み通りに「すき者どもの心尽くさするくさはひ」となる。源氏の満足ぶりは、兵部卿宮の「すきたまへる心ばへを見るがをかしうもあはれ」にも思う(③胡蝶176)様子や、予想外の人物柏木の和歌に感嘆する様子から確認できる。が、「思ふとも君は知らじなわかかへり岩漏る水に色し見えねば」(③胡蝶177)とある和歌が柏木のそれだと知らなかった源氏は、返事の仕方や相手を選ぶべきことなどを、今は玉鬘に仕える右近を呼び寄せて訓育する。玉鬘を含めた、そこに居合わせた三人の様子が、

…(源氏ガ訓戒ヲ)聞こえたまへば、君(＝玉鬘)はうち背きておはする、側目いとをかしげなり。…(六

条院ノ一人のありさまを見知りたまふままに、いとさまよう、なよびかに、化粧なども心してもてつけたまへれば、いとど飽かぬところなく、はなやかにうつくしげなり。⑦他人と見なさむは、いと口惜しかべう(源氏ハ)思さる。右近もうち笑みつつ見たてまつりて、

⑧親と聞こえんには、似げなう若くおはしますめり、さし並びたらんはしも、あはひめでたしかし、と思ひゐたり。(③胡蝶178〜179)

と描写される。玉鬘から源氏、そして右近の順に移って行く語りの視点の移動によって、玉鬘を見る源氏と源氏を見る右近が映し出されていく。庇護者の親を装って教訓したものの、⑨の源氏は六条院に入ってから美しさを増した玉鬘を人に渡しかねると思う。⑩はそのような源氏を見る右近の視線だが、彼女は、源氏の様子が親としては相応しくないくらい若く、源氏と玉鬘が夫婦としても似合うと見ている。右近が、玉鬘との邂逅を報ずる際に修行者との色恋沙汰でもあったのかと「はかなき御戯れ言」を言われたこと(③玉鬘120)や、玉鬘の部屋に入る源氏の「この戸口に入るべき人は、心ことにこそ」と発した色恋めいた言葉¹⁴を聞いていたこと(③玉鬘129)から考えると、彼女の視線は日ごろの冗談の中に潜んでいた源氏の男女関係への興味を

引きずったもののように思われる。源氏は消え去ることのない男女関係への興味を養女の玉鬘にかきたてられるようになったのである。

源氏が玉鬘に対して恋情を抱えている様子は、彼女を六条院に迎えた翌年の元日に「かく見ざらましかばと思ほすにつけては、えしも見過ぐしたまふまじくや」とあるところ(③初音148)から確認できるが、表面的には親として振る舞いながらも心に恋情を閉じ込めている相手としては玉鬘が初めてではない。彼女の他に、今は中宮となつてゐる、齋宮女御がいた。蛩巻にはそのような彼女に関する言及が、

(1) (源氏ハ) なほさる御心癖なれば、中宮なども、いとうるはしくやは思ひきこえたまへる、事にふれつつ、ただならず聞こえ動かしなどしたまへど、⑪やむごとなき方のおよびなくわづらはしさに、下り立ちあらはしきこえ寄りたまはぬを、この君(Ⅱ玉鬘)は、⑫人の御さまもけ近くいまめきたるにおのづから思ひ忍びがたきに、をりをり人見たてまつりつけば、疑ひ負ひぬべき御もてなしなどはうちまじるわざなれど、ありがたく思し返しつつ、さすがなる御仲なりけり。(③蛩202〜203)

とある。源氏は齋宮女御に対しても恋情を抱えていながら、

その身分ゆえに本気にならない。だが、身分高い中宮に對する思いを自制した代償でもあるかのように、源氏は同じく養女である玉鬘に傾斜していく。ここに玉鬘を養女に設定した意義があるように思われる。

胡蝶巻で右近に玉鬘への思いを察知された源氏は、間もなくして閉じ込めておけない思いを玉鬘にうち明ける。源氏は、母夕顔に言寄せた、「橘のかをりし袖によそふればかはれる身ともおもほえぬかな」(③186)の和歌で思いをうち明けたが、それは女に近寄る際の源氏の常套手法である。薄雲巻で齋宮女御に思いをうち明ける際にも彼は、「つひに心もとけずむすほはれてやみぬる」六条御息所の話を持ち出していた(②薄雲459)のである。そのような源氏に對して玉鬘は、「袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ」(③胡蝶186)と、才気を發揮して言い返したものの、養父の訴えに困じて落涙する。続く物語には、

(A)：(源氏八玉鬘三) あはれげになつかしう聞こえたまふこと多かり。まして、かやうなるけはひは、ただ昔の心地していみじうあはれなり。④わが御心ながらも、ゆくりかにはあはつけきことと思し知らるれば、いとよく思し返しつづ、人もあやしと思ふべければ、いたう夜も更かさで出でたまひぬ。(源氏)「⑤思ひ疎み

たまはば、いと心憂くこそあるべけれ。よその人は、かうほれほれしうはあらぬものぞよ。⑥限りなく底ひ知らぬ心ざしなれば、人の咎むべきさまにはよもあらじ。ただ昔恋しき慰めに、はかなきことをも聞こえん。同じ心に答へなどしたまへ」と、いとこまかに聞こえたまへど、我にもあらぬさまして、いとこまかに思いたれば、(源氏)「いとさばかりには見たてまつらぬ御心ばへを。いとこよなくも⑦憎みたまふべかめるかな」と嘆きたまひて、(源氏)「ゆめ気色なくてを」と出でたまひぬ。(③胡蝶188～189)

とあるが、この場面は源氏が齋宮女御に恋情を訴えた次の薄雲巻に類似する。

(a)このついでに、(源氏八齋宮女御二)え籠めたまはで恨みきこえたまふことどもあるべし。いますこしひがこともしたまひつべけれども、いとうたてと思いたるもことわりに、⑧わが御心も若々しうけしからずと思し返して、うち嘆きたまへるさまのもの深うなまめかしきも、心づきなうぞ思しなりぬる。やをらづつひき入りたまひぬるけしきなれば、「⑨あさましうも疎ませたまひぬるかな。⑩まことに心深き人はかくこそあらざなれ。よし、今よりは⑪憎ませたまふなよ。つらから

む」とて、渡りたまひぬ。

(②薄雲463)

先に述べたように、両者においては養女に対する恋情であることとその訴えに際してそれぞれの母親を持ち出すことが共通する。のみならず、(A)と(a)においては表現の類似が著しく、そこには傍線を引いておいた。まず、玉鬘と斎宮女御に恋情をうち明けた直後の源氏からは、(A)と(a)に見るように、「わが御心」への反省によって「思し返し」た自制が見られる。(A)においては点線部の「出でたまひぬ」が繰り返されており、時間を巻き戻した叙述の仕方となっているものの、(a)と同じく退く前に女に対して言葉を発している。その言葉は、(B)と(b)に見るように、自分を疎む相手への恨みから始まっており、(D)と(d)のような憎まれることに関する言及がある。肝心なのは(c)と(c)の相違だが、(a)での源氏は自分が「まことに心深き人」ではないために拒まれたと、自嘲的ではあるものの、斎宮の拒絶を受け止めている。源氏の権力の根拠を、弟への後見から、養女を帝に

入内させた婚姻関係に基づく後見に変えるべく、物語は源氏に拒絶を受け止めさせている。それに対して、(A)での源氏は無量の底知れない恋情だから人に咎められるような仕打ちは決してしないと行ってさらに思いを押しつけている。同じ自制とは言いながらも、源氏は玉鬘に対しては一

層積極的な態度を取っているのである。(I)においてはそのような差が④の身分の高さと⑦の親しみやすさ由来すると記されるが、そこにこそ二人目の養女を設けた物語の意義があるのではないだろうか。すなわち、栄華成就を辿る展開においてはさらに繰り返り広げ得なかつた養女に対する思いつきという問題を引き継ぐべく玉鬘が登場した、ということである。物語は斎宮女御の時よりも増して積極的に玉鬘に迫る様子を描くことで、栄華成就を辿る物語の論理から源氏を解放させたのである。

四、玉鬘退場の仕方

以上、養女に対して親になりきれない源氏を描く物語に関して述べた。だが、周知のように、玉鬘と源氏は結ばれることなく、真木柱巻では突然玉鬘が髭黒の掌中に帰する結果となっている。このような結果から光源氏の衰えを説き取る見地もあるが、玉鬘十帖における眼目は「男女が関係を結ぶところ」ではなく「養女の懸想に嫌悪する玉鬘の心をいかに惹きつけていくか」という過程にある。そのことは玉鬘が髭黒の妻となる結末によって「ほど経るままに思ひ出でられたまふ」源氏の位相(③真木柱391)が生じることからもわかる。なおも衰えない魅力を持つ源氏が、玉

鬢に心惹かれていながらも彼女を手放した、と言える。結果的に源氏は好色でありながら好色ではない人物として造型されたと言えよう。が、そのような源氏の造型においては、源氏の後継者としての夕霧が浮上するように思われる。以下、野分巻から藤袴巻までを中心にそれを確認する。

野分巻では毎日三条宮と六条院を出入りしていた「うるはしくものしたまふ君」の夕霧(③野分268)が嵐に襲われた六条院の女君たちを垣間見る内容が繰り返される。そのような夕霧を、三谷邦明氏は、近親相姦的な禁忌の違犯という可能性を示唆しながらも、「まめ」であるために視点人物に留まっていると論じた⁽¹⁷⁾。大いに肯かれるが、「源氏ハ」至り深き御心にて、もしかかすること(「夕霧ガ紫ノ上ニ心惹カレルコト)もやと思すなりけりと思ふに、(夕霧ハ)けはひ恐ろしうて、：」(③野分266)や「玉鬢トノ関係ヲ垣間見ルコトヲ源氏ガ)見やつけたまはむと(夕霧ハ)恐ろしけれど」(③野分279)などに見る夕霧の憂慮も考慮に入れるべきではなからうか。すなわち、父親に対する畏怖が夕霧に自制を促したということだが、野分巻での夕霧はそのような畏怖の中でも玉鬢に寄り添う源氏の観察を止めない。

いであなうたて、いかなることにかあらむ、(源氏ハ)思ひよらぬ隈なくおはしける御心にて、もとより見馴

れ生ほしたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり、むべなりけりや、あな疎ましと思ふ心も恥づかし。女の御さま、げにはらからといふとも、すこし立ち退きて、異腹ぞかしなど思はむは、などか心あやまりもせざらむとおぼゆ。⁽¹⁸⁾ (③野分279~280)

まず、引用における夕霧の垣間見を導く展開を押さえておきたいが、そこからは玉鬢を軽く扱う源氏の態度が確認できる。源氏は紫の上の居所では、彼女を夕霧に見られたのではないかと疑っていたが、夕霧とともに玉鬢の居所を訪れる際には「ことごとしく前駆な追ひそ」(③野分277)と接近する気配を消そうとした。右の点線部で異腹の姉だと思いつつも心惹かれる律儀者の様子は、源氏の招いたものとも考えられよう。玉鬢に寄り添う父の様子を見て決まり悪さを感じながらも夕霧は「思ひよらぬ隈なくおはしける」源氏のことだからと納得するが、ここでは源氏が好色な人として思われていることを押さえておきたい。

野分巻で六条院の女君たちを垣間見た夕霧が「かかる人々を、心にまかせて明け暮れ見たてまつらばや」(③野分285)と思うことから、「まめ人」の視線によって六条院の理想性を保証する物語の意図が感じられる。が、その目的を達成してからの物語は玉鬢の処遇の決定を急ぎ、行幸巻

に到ると玉鬘との関係によって「軽々しかるべき御名」が世間に広まる事態や、内大臣に際だつて婿扱いされる「そこがまし」い事態を嫌つた(③行幸289)源氏が、彼女に宮仕えを勧める内容が綴られる。のちに冷泉帝の後宮への編入が玉鬘や内大臣によって、「心よりほかに便なきことあらば」(③藤袴327)、「なまほのすいたる宮仕に出で立ちて、苦しげにやあらむ」(③真木柱350)などと懸念されることから察すると、玉鬘が、齋宮女御の軌跡を追つて冷泉帝の後宮に入る可能性も皆無ではなかつたように思われる。無論、その展開は出仕の前の玉鬘を髭黒が横取りすることによつて退けられたが、そこからも二人の養女の軌跡を重ね合わせにする物語の意図が垣間見られよう。

ともあれ、行幸巻には源氏による出仕の勧誘と、それに備えた玉鬘の着裳が取り上げられる。着裳の腰結い役を内大臣に依頼するに際して源氏は玉鬘の素性をうち明けるが、それを契機に物語世界には玉鬘の素性が公然の秘密となり、果てには真相を知つた髭黒が実父の内大臣に頼つて求婚してくる次第である。その際、源氏の「すき心」を推察した内大臣は、次の二重傍線部から確認できるように、玉鬘の処遇は源氏の意に従うべきだと思つている。

(夕霧)「年ごろかくて(玉鬘ヲ)はぐくみきこえたまひ

ける(源氏ノ)御心ざしを、ひがさまにこそ人は申すなれ。かの(内)大臣もさやうになむおもふけて、(髭黒ノ)大将のあなたさまのたよりに気色ばみたりけるにも、答へたまひける」……(夕霧)「内々にも、やむことなきこれかれ(ノ妻達ガ)年ごろを経てものしたまへば、えその筋の人数にはものしたまはで、(玉鬘ヲ)棄てがてらにかく譲りつけ、おほぞうの宮仕の筋に領ぜんと思しおきつる、いと賢くかどあることなりとなん(内大臣ガ)よるこび申されけると、たしかに人の語り申しはべりしなり」と、いとうるはしきさまに語り申したまへば、げに、さは思ひたまふらむかしと思すに、いとほしくて、……(源氏ノ)大臣も、然りや、かく人の推しはかる、案におつることもあらましかば、いと口惜しくねぢけたらまし、かの(内)大臣に、いかでかく心清きさまを、知らせたてまつらむ、と思すにぞ、げに宮仕の筋にて、けさやかなるまじく紛れたるおほえを、かしこくも思ひよりましたまひけるかなとむくつけく思さる。

(③藤袴336~337)

行幸巻で玉鬘の素性を知つた夕霧は、野分巻の垣間見でそれに気づかなかつた自分の「しれじれしき心地」(③行幸31)を悔やんだ。その悔やみの延長だろうか、右の藤袴

巻での夕霧は垣間見以来抱えていた疑惑を確認すべく、内大臣や世間に託けて玉鬘の出仕の件で父を問い詰める。傍線部の言葉は、玉鬘の素性を聞いた内大臣が「(玉鬘ヲ)尋ね得たまへらむはじめを思ふに、(源氏ハ)定めて心きよき見放ちたまはじ、やむごとなき方々を憚りて、うけばりてその際にはもてなさず、さすがにわづらはしう、ものの聞こえを思ひて、かく明かしたまふなめり」(③行幸310)と付

度した内容とほぼ重なり、三条宮と六条院を出入りしていた夕霧が単に外聞を伝えたかのようにも見える。が、右の夕霧の立場は内大臣と異なるものがある。玉鬘を妻妾にするか出仕させるかを源氏の意に従うべきだと思ふ内大臣にとって我が娘が太政大臣と結ばれることは「瑕とすべき」ではない、世評の劣るものではなかった(③行幸310)。しかし、源氏が玉鬘に心惹かれることを「ひがさま」だと言い、玉鬘を出仕させるに至った源氏の恋情を内大臣が皮肉ったと伝える夕霧の立場は、「心のままにもあらば、世の人の譏り言はむことの軽々しさ」(③常夏234)を心配して玉鬘への思いを自制する源氏の立場に寄り添っている。夕霧が、六条院の女性たちとは身内の間柄だと考え(③野分285)、源氏死後に六条院に移って「わが世にあらん限りだに、この(六条)院荒ら」すまいと思ふこと(⑤匂兵部卿宮20)などを考

えると、彼の詰問を六条院の後継者の立場から発したものだと考えられる。

夕霧から内大臣の付度を伝えられた源氏は、玉鬘との間に情事がなかったことに安堵しながらも、「げに宮仕の筋にて、けざやかなるまじく紛れたるおぼえを、かしこくも思ひよりたまひけるかな」と自分の計略を見抜かれて苦々しく思う。内大臣に見透かされた計略を成功させると、源氏は好色な人として世間の無遠慮な世語りの的になりかねない。夕霧の詰問は源氏にそのような事態を回避させるべく設けられた「世語り」であり、そのような性格は夕霧の報告を受けた源氏の反応からも考えられる。

夕霧の話聞いた源氏は、「げに、さは思ひたまふらむかし」と、内大臣の付度に納得するが、この様子から察すると、彼には玉鬘の素性をうち明けることよってその好色な思想が見透かされる事態までは予想できなかったようである。玉鬘に心惹かれていった源氏の焦燥感も読み取れるが、そのような源氏にわかって、右の引用における夕霧が世間体を心配して父親に玉鬘を手放すことを慫慂するのである。引用の前に「中宮かく並びなき筋にておはしまし、また弘徽殿やむごとなくおぼえことにてものしたまへば、いみじき御思ひありとも、(玉鬘ハ)立ち並びたまふこと難

くこそはべらめ。」(③藤袴 334～335)と、玉鬘の出仕を状況に即して考える様子に考え合わせると、夕霧は、「世の重しとなるべき」人物(③少女²²)にしたいという源氏のもくろみ通りに着実に成長していることになる。玉鬘が髭黒の掌中に帰する展開が、物語としては、以上に確認した夕霧の詰問に対するもつとも穏当な解決だったと思われる。物語は玉鬘に対する源氏の好色を語りながらも、それまで築いてきた彼の栄耀に傷がつかないように後継者の夕霧を操って、その好色ぶりの露見を防いだのである。

五、結

以上、玉鬘が登場する背景から髭黒の掌中に帰するまでを視野に入れて、光源氏の造型がいかに変化したかを確認した。斎宮女御と同じく養女として迎えられた玉鬘は、女御の背負っていた栄華成就の世界から源氏を解放させて彼を再び恋の世界へ復帰させるべく登場した。光源氏像が物語世界に則って変化したと言えるが、恋の世界に復帰した源氏にも玉鬘と結ばれることは許されない。心のままに振る舞うことができない太政大臣の源氏は、彼の歩んできた栄華の時間から完全に自由になることが許されないのである。

玉鬘十帖は、それまで語られてきた源氏の時間を継承しながらも、時の流れに蝕まれることなく恋し続ける源氏を描く。玉鬘は、少女巻における五節の登場方法を引き継ぐものの、それとはまるで違う源氏の時間を紡ぎ出している。源氏は蓄積されてきた物語の時間に支えられて玉鬘の父親になったが、それを拒むかのように玉鬘に迫っていく。玉鬘に恋情を押しつけ続ける様子を通して、源氏は常に若くあり続けようとする精神の象徴となっている。その精神をもって、物語は栄華成就の論理によって挫折した斎宮女御との関係を代償しようとした。が、その栄華と不可分な世俗的羈絆から逸脱しようとする精神は、それまで構築してきた物語世界を完全に否定する形を取らないために、全面的代償にまでは繋がりが得ない。このような精神運動によって、子どもの成長に伴う加齢を自覚しながらも親とは思われない若さで恋の世界に居続ける源氏像が作り出されるのである。

【注】

(1) 山中裕「六条院と年中行事」『講座源氏物語の世界 第五集』有斐閣 一九八一年八月、山田利博「六条院における玉鬘——繁栄の象徴としての役割について——」『中古文学論攷』一

九八七年十二月、など。

巻数・巻名・頁数を記した。

- (2) 高木和子「玉鬘十帖論」『源氏物語試論集論集平安文学第四号』勉誠社 一九九七年九月、のち『源氏物語の思考』風間書房二〇〇二年三月
- (3) 河添房江「六条院聖性の維持をめぐる——玉鬘十帖の年中行事と「いまめかし」——」『国語と国文学』一九八八年十月、のち『源氏物語表現史論と王権の位相』翰林書房 一九九八年三月
- (4) 藤原克己「幼な恋と学問——少女巻——」『光る君の物語源氏物語講座3』勉誠社 一九九二年五月
- (5) 秋山虔「玉鬘をめぐる」『文学』一九五〇年十二月、のち『源氏物語の世界』東京大学出版会 一九六四年十二月
- (6) 三角洋一「野分以後——野分・行幸・藤袴——」『国文学』一九七七年十二月
- (7) 三谷邦明「玉鬘十帖の方法——玉鬘の流離あるいは叙述と人物造型の構造——」『物語文学の方法Ⅱ』有精堂出版株式会社 一九八九年六月、なお、鷺山茂雄「玉鬘の登場——付・紫上には何故子供がなかったか——」『平安朝文学研究』一九七二年八月、にも玉鬘巻の冒頭における時間の逆行がかなり意識的になされているという指摘がある。
- (8) 『源氏物語』の引用は小学館の新編日本古典文学全集により、
- (9) 門澤功成「『源氏物語』少女巻の五節舞姫 光源氏・夕霧の対照性と和歌の働き——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要第三分冊』二〇〇三年二月、は五節の舞姫を献上するところから太政大臣になっている源氏の繁栄とその誇示を指摘する。
- (10) 少女巻における源氏と夕霧の対照性に関する論究としては、松井健児「幻巻の十一月——光源氏と五節舞姫——」『国語と国文学』一九八八年一月、のち「光源氏と五節の舞姫」『人物で読む源氏物語三』勉誠社 二〇〇五年十一月
- (11) 森一郎「玉鬘物語の構想について——玉鬘の運命をめぐる——」『源氏物語の方法』桜楓社 一九七一年六月
- (12) 伊井春樹「玉鬘十帖の主題」『源氏物語の主題上 源氏物語研究集成第一巻』笠間書房 一九九八年六月
- (13) 藤井貞和「玉鬘」『源氏物語必携Ⅱ』一九八二年二月、には源氏の妻妾として玉鬘を待遇してほしい意図が右近にあつたという指摘がある。
- (14) 『湖月抄』の師説には、「此戸口はけそう人などの入りぬべきかた也との心也」と、色恋めいていることが指摘される。
- (15) 拙稿「六条御息所の再登場——母と女の位相に注目して——」『東京大学国文学論集』二〇一五年三月

(16) 高木和子氏の前掲注(2)

(17) 三谷邦明「夕霧垣間見」『講座源氏物語の世界』有斐閣 一

九八一年八月、のち「野分巻における〈垣間見〉の方法―〈見ること〉と物語あるいは〈見ること〉の可能と不可能―」『物語文学の方法Ⅱ』有精堂出版株式会社 一九八九年六月

(18) 斎藤暁子「玉鬘の結婚をめぐる」『源氏物語の探究第八輯』

風間書房 一九八三年六月

(19) 夕霧が内大臣と異なる立場であることは、熊谷義隆「少女巻から藤裏葉巻までの光源氏と夕霧―野分巻の垣間見、そして描かれざる親の意志―」『源氏物語の展望第一輯』弥生書店 二〇〇七年三月、に指摘がある。一方、夕霧が内大臣の立場に即していると捉える論としては、斎藤暁子氏の前掲注(18)。

(20) 源氏は「(源氏八) 中将の君(夕霧)を、こなた(紫ノ

上ノ居所) にはけ遠くもてなしきこえたまへれど、(明石ノ) 姫君の御方には、さしもさし放ちきこえたまはず馴らしたまふ。わが世のほどは、とてもかくても同じことなれど、なからむ世を思ひやるに、なほ見つき思ひしみぬることどもこそ、とりわきてはおほゆべけれど、南面の御簾の内はゆるしたまへり。」(③蛩216〜217) と、夕霧を跡継ぎと考える。

(21) 三田村雅子「源氏物語の世語り―「他者」の言葉・「他者」の空間―」『語り・表現・ことば 源氏物語講座6』勉誠社 一九九二年八月

(22) 三角洋一前掲注(6)